

# 第3章

# 地方プログラム

## 1. 地方プログラムについて

参加青年は9月30日（土）～10月8日（日）、3グループに分かれて地方プログラムに参加した。ドミニカ共和国とアイルランドの青年は高知県と鳥取県、エストニア共和国とヨルダン・ハシェミット王国の青年は函館市と香川県、ミャンマー連邦共和国とチリ共和国の青年は沖縄県と奈良県を訪問した。高知県、函館市、沖縄県では、地元青年とのディスカッション・プログラムに参加し、鳥取県、香川県、奈良県ではホームステイを体験した。

訪問県市名	国名
高知県、鳥取県	ドミニカ共和国、アイルランド
函館市、香川県	エストニア共和国、ヨルダン・ハシェミット王国
沖縄県、奈良県	ミャンマー連邦共和国、チリ共和国

## 2. 高知県

月 日	時 間	活動内容		
9月30日（土）	11:25	羽田空港出発 ANA563便		
	12:50	高知空港到着		
	14:00～17:00	高知市青年センターアスパルこうち オリエンテーション、アイスブレイク 講義：「ダイバーシティにおける坂本龍馬のキャリア形成・多文化共生・インテリジェンスリテラシー」		
	17:30	ホテル着		
	19:00～20:00	夕食		
10月1日（日）	9:00	3コースに分かれて視察		
		キャリア形成コース	メディアリテラシーコース	多文化共生コース
		高知市立中央公民館 9階 第一学習室	高知市立中央公民館 10階 絵画室	高知市立中央公民館 9階 特別学習室
	12:00～13:00	昼食		
	13:15～14:15	高知よさこい情報交流館 地域視察		
	14:30～16:45	高知市立中央公民館 ディスカッション		
	17:30～20:00	文化交流会		
	20:30	ホテル着		
10月2日（月）	9:00～12:00	高知共済会館 ディスカッション、まとめ、発表		
	12:00～13:00	昼食		
	14:00～16:00	龍馬の生まれたまち記念館 視察		
	16:30～19:00	夕食		
	19:30	ホテル着		

10月3日 (火)	9:30 ~ 10:45	高知城視察
	11:00 ~ 11:45	高知県庁表敬訪問 * 高知県文化生活スポーツ部 部長挨拶 * ド ミニカ共和国 団長挨拶 * ギフト交換、記念撮影
	12:00 ~ 13:30	昼食
	14:00 ~ 15:00	五台山、竹林寺訪問
	15:30 ~ 16:30	桂浜散策
	16:30	ホテル着
	18:00 ~ 20:00	歓送会 * 実行委員会代表挨拶 * 参加青年代表挨拶 * パフォーマンス
10月4日 (水)	9:00	鳥取県へバスにて移動



最近、物忘れのひどい私ですが、第14回「青年の船」事業（1981年1月～3月）の出来事は、ほぼ憶えています。その2か月間の出会い、語り、夢は、かけがえのない青年国際交流活動として、消えることのない情熱を私たちの人生に与えてくれたからです。

内閣府青年国際交流事業地方プログラムを受け入れるに当たり、私は実行委員やスタッフに伝える言葉があります。それは、「私たちはゲスト青年の人生に生き続ける日本代表青年であり、その出会いと語り、夢は一生消えることのない宝として生き続ける」という、このプログラムに参加した青年だけが共感できる一つの事実です。

さて、高知県としては今回初めて国際青年育成交流事業を受け入れ、合宿プログラムのディスカッションテーマも一新し、キャリア形成、多文化共生、メディアリテラシーとなりました。高知プログラムでは、こ

れらの三つのテーマをさらにフォーカスし、ユニークなトピックを設定し、有意義で楽しい交流を行うことができました。合宿3日目のプレゼンテーションでは、外国青年のユニークなアイデアが随所にちりばめられ、日本青年も大きな刺激と啓発を受けたことは、国際交流ならではの異文化という収穫でした。そして、高知のローカルユース全員が、来高したドミニカ共和国とアイルランドの青年の幸福と活躍を祈り、いつか再会できる日を待ち望んでいます。

最後に、このような国際青年交流の機会を与えてくれた内閣府、高知県を始め、事業実施団体である青少年国際交流推進センター、受入プログラムの同志である鳥取県のローカルユースに衷心より感謝し、また来年度も新たな外国青年を受け入れたいと願っています。

## 受入実行委員会

今夏は高知県IYEOの二つの夢が成就しました。一つは、毎年8月に開催している青少年育成フォーラムにおいて英語によるディスカッションプログラムを導入することで、もう一つは、内閣府の国際青年育成交流事業地方プログラム（英語使用による合宿プログラム）を受け入れることです。

今回のディスカッションテーマは、キャリア形成、多文化共生、メディアリテラシーでした。東京プログラムとは違ったプログラムにしようと、個人に焦点を当てたオリジナルトピックを設定し、実行委員会を重ねて受入れの日を迎えました。

高知といえば坂本龍馬です。龍馬の人生は、実にユニークで面白いキャリア形成と多文化共生であり、インテリジェンスリテラシーの連続でした。龍馬の人物紹介と「龍馬の生まれたまち記念館」の参観と合わせてアレンジしました。ドミニカ共和国とアイルランド青年にとっては、初めて耳にする偉人の話でしたが、彼らはすぐに画像検索をしたりして、興味を持ち始めていました。

私が担当したディスカッションプログラムでは、キャリア＝人生という考えのもと、どのようにして今のキャリアに至ったのか、影響を受けた人、今後の人

生観などについて話し合いました。個人のキャリアに焦点を当てることでより深い討論ができました。

高知よさこい情報交流館の参観や商店街で見学した地元チームのよさこい鳴子踊りを通じて、高知の魅力を十分に堪能してもらうこともできました。

高知という地方都市にしながらも英語によるディスカッションプログラムが行われ、外国青年と交流できる本プログラムに今後もより多くの日本青年に参加してもらいたいと期待を寄せています。





## ディスカッション参加青年

高知で初めて国際青年育成交流事業地方プログラムを受け入れました。ゲストは、ドミニカ共和国とアイルランド青年17名でした。ドミニカ共和国青年の中には「3回目の応募でやっと合格した」という青年もいて、各国の青年と人生の経験を共有できたことが良かったです。夕食の席では、すき焼きに生卵を付けるという日本人の食習慣に驚いていた外国青年もいて、文化の違いを感じる機会も多かったです。

私はメディアリテラシーのグループに参加し、選挙活動や就職活動の違いについてディスカッションしましたが、外国青年の積極的な姿勢、発言の多さ、ドミニカ共和国青年においては英語レベルの高さに驚きました。昼食ではベジタリアンの青年と同席になり、日本ではマイナーなベジタリアンについて知ることができました。商店街で行われていたよさこい鳴子踊りを

参観したり、実際によさこい鳴子踊りを体験してもらったりする機会もあり、彼らに高知の文化を体験してもらうこともできました。

「高知の食べ物がおいしい」「今日は日本の中で最高の日」「日本人はシャイだと聞いていたが、高知の人はみんなフレンドリーだ」と外国青年から嬉しいコメントをもらったり、ショッピングモールでは地元の高校生と一緒に写真を撮ったり、と楽しい時間を過ごすことができました。

外国青年のパフォーマンス力や積極的な交流姿勢に刺激を受けたローカルユースも来年の交流事業の受入れと自分磨きの決意に燃えています。先日、結婚式を挙げたドミニカ共和国青年から、結婚式の飾りつけに使った折り鶴の写真が送られてくるなど、外国青年とはSNSを通じて交流が続いています。

## アイルランド参加青年

高知県プログラムはローカルユースと実行委員の皆さんの温かいおもてなしの心であふれていました。東京から飛行機で到着した時からそれは明らかでした。私たちを待っていたのは青空と温暖な天気、それにも増してプログラム主催者の皆さんの温かい歓迎でした。出迎えの大きな看板を持って待ち受けていた彼らが、愛情を込めて抱きしめてくれました。

高知市青年センターに向かった私たちは、ローカルユースの皆さんの温かい歓迎を受けました。彼らはとても気さくで、お互いの文化について熱心に学び合いました。

高知県ではメディアリテラシー、キャリア形成、多文化共生のテーマの下で興味深いディスカッションを繰り返しました。各コースのディスカッションの成果発表は、情報満載で、魅力的で創造的でした。コース別ディスカッションに加え、高知の文化史跡を訪問する機会もあり、プログラムの学びと体験のバランスは完璧でした。私にとってのハイライトは高知城を訪れ、城下町や1727年の大火、独特の天守閣などについて学んだことです。高知城は数ある異文化体験のハイライトの一つでした。高知よさこい情報交流館ではよさこい踊りも学びました。これはとても楽しい経験で、アイルランド団とドミニカ共和国団メンバーの評

価も高かったです。視察先の龍馬のうまれたまち記念館はとても楽しく、イオンモール視察の機会を頂いたことも良かったです。

高知県プログラムのロジ面は最高でしたが、それは優秀な実行委員会と智子さんと前田氏の御尽力の賜物です。様々な手配が行き届き、食事制限のある団員にも御配慮いただきました。

歓送会では、私たち団員の多くの胸に熱いものが込み上げてきたと言って間違いありません。特筆すべきは、高知の実行委員の皆さんの時間を惜しまぬ御尽力のおかげで、私たちのすばらしい滞在が実現したことです。

ありがとうございました。



### 3. 鳥取県

月 日	時 間	活動内容
10月4日 (水)	14:30	鳥取県到着
	15:00 ~ 17:00	鳥取砂丘視察
	17:30	ホテル着 夕食
10月5日 (木)	9:30 ~ 10:00	鳥取県庁着 表敬訪問 *鳥取県観光交流局 局長挨拶 *アイルランド代表挨拶 *記念品交換、写真撮影
	10:00 ~ 11:00	鳥取県概要説明
	11:00	鳥取県庁発
	11:30 ~ 13:00	昼食
	15:00 ~ 17:00	米子ソーラーパーク視察
	17:30	ホテル着 夕食
10月6日 (金)	9:30 ~ 11:30	医療福祉法人養和会視察
	12:00 ~ 13:30	昼食
	14:00 ~ 16:30	J R西日本後藤車両所視察
	18:30 ~ 20:30	歓迎会・ホームステイマッチング *米子市長挨拶 *ドミニカ共和国代表挨拶 (参加青年) *各国パフォーマンス
10月7日 (土)		終日ホームステイ
10月8日 (日)	13:00	ホームステイ先から米子空港に集合
	14:20	米子空港出発 ANA1088便
	15:45	羽田空港到着 都市センターホテル着





御尽力いただいた皆様、内閣府はじめ、一般財団法人青少年国際交流推進センターの松尾様、通訳の坂本様、そしてドミニカ共和国とアイルランドのすばらしい青年の皆さんに、そして県内の交流も深まり、とっとり青友会、ホームステイや視察の受入れをしてくださった皆様に、感謝いたします。

プログラムは鳥取砂丘の視察から始まり、二日目は鳥取県観光交流局長表敬訪問後、米子ソーラーパークへ。「ペッパー」とダンスをし、ソーラーパネルの視察を行いました。三日目は医療法人養和会養和病院のメディカルフィットネスセンター「CHAX」を訪問。理学療法士の説明を聞いた後は障がい者スポーツ体験で、選手である養和会の職員さんより教わりながら上半身で投げる砲丸投げ・車いすラグビー・ボッチャ・ラダーに挑戦しました。皆様積極的で地元メディアの取材も受けました。午後はJR西日本後藤車輛所で車体のメンテナンス場面などを見学。夜には歓迎会で青年の皆さんのすてきな衣装とすばらしい歌と俳句、ダンスで盛り上がりました。皆さんお忙しい中パフォー

マンスを準備してくださり、すばらしい時間でした。そのままホームステイとなり、4日目は終日ホームステイ。5日目はホストファミリーと共に空港に集合し、帰路に就きました。

青年の皆さんはお疲れでしょうに、明るく笑顔にあふれ、また日本文化にも興味を示し、チームの雰囲気の良いも伝わる本当にすてきな青年ばかりで、すばらしい皆さんと出会えたことを嬉しく思います。お仕事を持っておられる方々ですので、学びの意識も高く、こちらが刺激をいただきました。もっと日頃のお仕事のお話を伺いたかったです。

青年の皆さんにはご不便をおかけしたことと思いますが、皆さんの寛大さや明るさに助けていただきました。プログラムが少しでも皆さんのお役に立つよう願います。またいつでも戻って来てください。青年の皆さんの今後の御活躍を祈念しております。これからもすばらしい交流が続きますように。Thank you ! Gracias !



私は9月に大学の海外研修、姉は3月に内閣府の日本・中国青年親善交流事業で共にホームステイを体験しました。その時にとっても良くしてくれたホストファミリーのように自分たちも機会があれば受入れをしたいと思っていました。私の母がとっとり青友会で活動しており、今回鳥取県で受入れのお世話をすると聞き、ホストファミリーになることを強く希望しました。

私たち家族が迎え入れたのは、ディオニスとアリエルというドミニカ共和国の二人です。初めて会ったとき、とっても温厚で笑顔がすてきな方という印象を受けました。実際そのとおりで、私たちのたどたどしい英語をきちんと聞いてくださり、スマートフォンの翻訳を駆使してコミュニケーションをとり、いつも笑顔で会話してくれました。

短い期間の中でどこに行けるか、行きたいか、何をしたいかなど、皆で計画を立てるのはとても大変でし

たが、二人が日本や鳥取のことに興味関心を持ってきて、特に砂の美術館と温泉に行ったとき、言葉にならないくらい感動していたのがとても心に残りました。

共に生活した時に、研修の時とは違う文化、食文化を新しく知りました。自分がホームステイ先に受け入れてもらうのと、ホストファミリーとして外国青年を受け入れるのとでは違った感動がありました。今回のホームステイでは自分なりのおもてなしをすることができ、楽しい思い出を作ることができました。

三日間私たちは本当の家族となり、兄妹のような生活を送ることができて本当にすてきな時間でした。

ドミニカ共和国と日本はかなり離れていますが、アリエルとディオニスが元気で幸せであることを祈っています。



鍵掛峠にて



砂の美術館前にて

アイランド人が日本を訪問する際は、東京や大阪など大都市における人々との出会いや日本文化の体験に限られることがほとんどです。けれども日本には文化、食べ物、温かい人々など、まだまだ多くのものがあるということをアイランド団のメンバーは知りました。地方プログラムでは日本で最も人口の少ない鳥取県を訪問する特別な機会を得ました。有名な鳥取砂丘、米子ソーラーパーク、JR西日本、医療福祉法人養和会を訪問しました。社会福祉法人ではパラリンピック選手と会い、デモンストレーションに参加し、2020年東京オリンピック開催に向けての準備について学びました。また、県庁表敬では、プレゼンテーションを通じて鳥取県が日本で訪れるべき素晴らしい場所であることを知りました。

課題別視察は鳥取県プログラム中でも楽しいものでしたが、ホームステイ体験は間違いなくハイライトでした。訪問3日目の夜、米子ファミリープラザでの文化交流会にてホストファミリーマッチングを行い、アイランド団青年はアイリッシュ・ダンスを披露する機会を得ました。ホストファミリー宅に着いた時から、私たちはまるで自宅にいるようにリラックスできました。新鮮な日本料理をいただき、アイランドと日本に関する話を交わし、日本の伝統的なふとんで眠

りました。ホームステイ中、鳥取県の様々な場所を訪れ、世界に誇る足立美術館の日本庭園と美術コレクションなどを鑑賞でき、すばらしい経験になりました。

ホームステイ最終日、ホストファミリーと一緒に大山のとっとりバーガーフェスタに出かけました。バーガーフェスタなるものに参加し、朝の10時からハンバーガーを食べるために何百人もが行列を作るのを見るのは初めてでしたが、とても楽しくて（おいしい）体験でした。これにてホームステイは終了しましたが、私自身やアイランド団の多くの青年にとって、ホームステイ体験は本事業で最も思い出深いものの一つとなりました。ホストファミリーの温かさとおもてなしに触れたことを始め、ありのままの日本の生活を知ることができたことは、私たち全員にとってかけがえのない機会でした。私たちはこの経験を決して忘れません。鳥取県プログラム中、私たちに同行して下さったボランティアの皆様についても触れておかなければなりません。皆さんとてもフレンドリーで面倒見がよく、滞在全体を楽しい経験にしてくれました。鳥取県訪問を通じて日本にはまだまだ多くのものがあるということを知りましたので、帰国後は友人や家族にこの美しい鳥取県を始め日本の各県を訪問するよう勧めたいです。



## 4. 函館市

月 日	時 間	活動内容			
9月30日（土）	10:20	羽田空港出発 ANA553便			
	11:40	函館空港到着			
	12:30～13:30	昼食			
	15:00～15:15	大沼公園散策			
	15:15	大沼セミナーハウスホワイエ着			
	15:15～17:00	オリエンテーション、ディスカッション開会式、地元参加青年顔合わせ			
	17:00～17:30	ディスカッションまとめ			
	18:00	ホテル着			
	18:30～20:30	夕食会			
10月1日（日）	9:30	3コースに分かれて視察			
		キャリア形成コース	メディアリテラシーコース	多文化共生コース	
		HIF（北海道国際交流センター） 講師： （ハローワーク函館 企画調整部門 統括職 業指導官）	はこだて未来大学  講師： （公立はこだて未来大学）	HIF（北海道国際交流センター）  講師：	
	12:00～13:00	昼食			
	13:00～17:00	北海道国際交流センターにてディスカッション			
	17:30	ホテル着			
	18:00～20:00	夕食と文化交流会 *HIF代表理事挨拶 *訪問団代表挨拶 *パフォーマンス			
	10月2日（月）	9:00～10:30	北海道国際交流センターにてディスカッションまとめ		
		11:00～11:30	函館市役所着 表敬訪問 *函館市長挨拶 *ヨルダン 団長挨拶 *記念品交換、写真 撮影		
12:00～13:00		国際交流センターにて昼食			
13:00～15:00		ディスカッションまとめ、発表			
16:00～19:00		元町散策、金森倉庫群にて解散、夕食			
19:30～20:30		函館山ロープウェイ、夜景見学			
21:00		ホテル着			
10月3日（火）		9:00～10:30	五稜郭公園、箱館奉行所、函館歴史名所視察		
	11:00～12:15	函館蔦屋書店視察			
	12:15～13:30	昼食（蔦屋書店FUSU）			
	14:00～16:00	公立はこだて未来大学講義			
	17:00	Café&Deli MARUSEN着 歓送会準備			
	18:00～20:00	歓送会 *北海道国際交流センター副代表理事挨拶 *ヨルダン団代表挨拶 *函館側パフォーマンス（よさこい）			
	20:30	ホテル着			

10月4日（水）	9:00～ 9:45	函館朝市 視察
	11:25	函館空港発 ANA746便
	13:05	伊丹空港到着
	13:45	伊丹空港出発（バス）



#### 一般財団法人北海道国際交流センター（HIF）

今年度はヨルダン・エストニアからの青年たちが函館に来訪しました。数日前にヨルダンの青年2名がキャンセルというハプニングがあったものの、天気にも恵まれ有意義なプログラムとなりました。函館の近郊には自然に恵まれた大沼国定公園があり、その中にある大沼セミナーハウスにおいて日本人のローカルユースと対面し、開会式を行いました。最初は緊張した面持ちだった日本人ユースたちも事前研修で準備をしていたアイスブレイキングのゲームで大いに盛り上げてくれました。

翌日函館に戻り、キャリア形成、多文化共生、メディアリテラシーのグループに分かれたディスカッションはそれぞれの文化背景、育ってきた環境や考え方により様々な意見が出てきて、どのグループもまとめるのにとっても苦勞をしているようでした。この三つのテ-

マの特徴として、同じ国同士でも環境や考え方が違えば意見が分かれるところがあり、最後の発表では一つの答えを出すというよりは、様々な意見があってもよいという多様性を認め合う発表となりました。このような多様性を認め合う人材育成は、まさにこの国際青年育成交流事業の大きな目的でもあることから、ヨルダンやエストニアの青年、そして日本人の青年たちにとってもこのプログラムの意義を再確認できるよい機会になったのではないかと思います。

また、私たち受入側でこの事業にかかわった多くの人たちが青年たちの心温まる交流を目にして自分たちの役割や私たちの目指すべき社会を考えることができたすばらしい経験でした。このようなプログラムを函館で開催することができたことをとてもうれしく思い、また今後も続けていきたいと強く感じました。

## ディスカッション参加青年

今回の事業参加を通じて感じたことが二つあります。一つ目は、それぞれの国の文化や習慣が違う中で議論をする大切さ、二つ目は、その中でお互いを思いやり、協力し合うことの大切さです。

今回のディスカッションでは、僕はキャリア形成についてディスカッションをしました。最初に、ハローワーク函館の方から函館の学生の就職状況や就職率、離職率について講義を受けました。その講義の中で、函館の学生が就職の際に函館市を離れる割合が高いという説明に外国青年たちがたいそう興味を持ったことが印象に残っています。そこで、どうして今の町を離れるのかという議論を進めていくと「就職をする際に、自分の中で何を最も重要視するか」という話になりました。その際に、家族のことを第一に考える、やりがいを求める、昇進を大事にするといった様々な意見があり、とてもおもしろく感じました。その背景には、国内の文化や家庭の事情があり、自分たちが普段見えないことを共有することができました。

ディスカッション以外のセクションでは、函館近郊

の大沼国定公園を散策したり、文化交流会でそれぞれの国のダンスをしたり、フリータイムにはみんなが様々な会話を楽しんだりしました。共通言語は英語で、そのレベルは各個人で違い、全てを理解し合うことは大変でしたが、お互いに相手の気持ちを汲み取ろうと、思いやりを持って会話をしていました。普段の生活ではあまりできないすばらしい体験ができ、とても貴重な機会となりました。



## エストニア参加青年

成田の国際青年交流会議に参加した後、エストニア団とヨルダン団は北の函館市へと出発しました。鎖国政策を廃止した後、日本が最初に外国との貿易を開始したのがこの函館市でした。現在、多くの観光客が美しい景色と美味しい食べ物を求めてこの地を訪れます。しかし函館市にはまだまだ多くのものがあります。私たち訪問団はそれらを経験することができました。

函館に到着した私たちを待っていたのは、スタッフと函館市のローカルユースの温かい歓迎でした。昼食後、大沼国定公園へと向かい、活火山の駒ヶ岳の麓に広がる美しい森林と湖畔の遊歩道を体験しました。次に大沼の静かな森の中にある大沼国際セミナーハウスのホワイエにてアイスブレイキングを行いました。その後、私たちの多くにとって、恐らくこの日のハイライトとなったグリーンピアホテルへとバスで向かいました。伝統的な和室と浴衣、リラックス効果のある温泉を備えたこのホテルで日本の伝統を満喫しました。

二日目の早朝、ホテルを出発した私たちはコース・テーマ別の講義に参加しました。午後は北海道国際交流センターにてキャリア形成、メディアリテラシー、多文化共生の各テーマでグループ・ディスカッションに取り組み、翌日のプレゼンテーションに備えました。エストニア団とヨルダン団は国際青年交流会議で各テーマに取り組んでいたため、まだテーマに馴染みの薄いローカルユースと知識を共有することができました。夕方にはホテル函館ロイヤルに移動し、美味しいシーフードの夕食とともにエストニア、ヨルダン、日本のプレゼンテーションを行いました。各国が大切にしている価値観を皆で共有したことはすばらしいことであり、それが日本での数々のすばらしい夜のベースになりました。参加青年の多くはカラオケに出かけ、大変楽しい時間を過ごしました。全く異なる三つの文化の人々が、ABBA、ボニー M、ブリストニー・スピアーズの歌を合唱しながら一つに団結しました。

三日目、エストニア青年とヨルダン青年は函館市長



を表敬訪問しました。市長は参加青年からの質問に丁寧に答えてくださり、函館で大いに学ぶよう奨励されました。私たちは引き続きローカルユースと共に学びを深め、まとめのプレゼンテーションを通じてキャリア形成、メディアリテラシー、多文化共生のテーマについての新しい視点を得ました。函館港地区に向かい、夕食と函館山からのとても美しい夜景を楽しみ、リラックスしました。ライトアップがまるで魚の尾びれのように見えました。

函館から戻る前日、有名な星型の五稜郭と地元のす

てきな蔦谷書店を訪問し、公立はこだて未来大学コミュニケーション科学の教授による詳細な大学見学ツアーにも参加しました。この日の最後は、地元のカフェでエストニア、ヨルダン、日本の文化交流を行いました。

函館はエストニア、ヨルダン、日本という異なる文化の人間同士の強い絆を見出すための環境を整えてくれました。違いを越えて団結した経験は、忘れ難いものとなりました。ありがとうございました。

## ヨルダン参加青年

飛行機で二時間の旅の後、私たちを待っていたのは、ヨルダンとエストニアの国旗を振りながら歓迎してくれた日本の方々でした。自己紹介の後、彼らの案内でイタリアンレストランに行き、一緒においしい昼食とともに歓談しました。

日本青年と大沼公園を散策し、貴重な時間を過ごした後、ディスカッションに取り組みました。メディアリテラシー・コースでは、1時間半でプレゼンテーションの準備をし、他コースのメンバー全員の前で発表しました。

高くそびえる函館山にロープウェイで登る計画を函館の人々が準備してくださっていることを知り、驚きました。

日本料理店であらゆる種類のお寿司に挑戦したことは、お金がかかりましたが、それだけの価値がありました。函館市は数々の自然の風景と親切な人々がいるすばらしい場所です。訪問先のはこだて未来大学では講義を聴講し、大学名を象徴するような近未来的な建築を楽しむことができました。またぜひここを訪問したいです。



## 5. 香川県

月 日	時 間	活動内容
10月4日（水）	16:40	香川県（ホテル着）
	18:00	さぬき麺業兵庫町店へ移動（徒歩）
	18:10～18:30	オリエンテーション
	18:30～19:30	夕食交流会
	19:40	ホテルへ移動
10月5日（木）	10:00～12:00	四国電力坂出發電所見学、体験等
	12:35～13:25	昼食
	13:25～13:40	善通寺市と善通寺についての説明
	13:50～16:30	総本山善通寺見学、体験等
	18:00～20:00	夕食
	20:30	ホテル着
10月6日（金）	10:00～15:00	高松市立亀阜小学校 学校訪問、昼食（給食） *各国代表挨拶 *各国パフォーマンス
	16:00～17:00	香川県庁表敬訪問 *香川県審議監挨拶 *エストニア共和国団長挨拶 *記念品交換、写真撮影
	18:45～21:00	歓迎会・ホームステイマッチング *香川県青年国際交流機構会長挨拶 *ヨルダン団長挨拶 *香川県政策部次長 乾杯 *各国パフォーマンス
	21:00	ホームステイ先へ
10月7日（土）		終日ホームステイ
10月8日（日）	11:50	ホームステイ先から高松空港に集合
	12:20～13:00	意見交換会、お別れ会（各国青年挨拶）
	14:00	高松空港出発 JAL480便
	15:15	羽田空港到着 都市センターホテル着

地方プログラムは、都市部と比較すると外国人との接点が少ない香川県にとって、とても貴重な機会となっています。私たち実行委員が、本地方プログラムを企画する際に最も心を砕いていることは、この貴重な機会を外国青年へのおもてなしに終始することなく、いかに香川県へと還元できるかについてです。そこで外国青年と共に訪問する先々には、各国の文化や習慣の違いなどを説明しながら、私たちとともに楽しんでいただけることをお願いしています。

本年は、産業見学として「四国電力坂出發電所」、文化見学として「総本山善通寺」を訪問しました。そのほか、昼食や夕食に際しても、各所にお世話になりました。いずれの御担当者も、こちらの要望どおりに、とても楽しみにしてくださいました。なかでも、教育現場体験としてお願いしている「高松市立亀阜小学

校」は、かなり早い段階から全校に周知したり、生徒たちによる出し物を練習したり、交流風景を全校の保護者にも公開するなどして、盛り上げてくださいました。その結果、小学校での交流は、外国青年たちだけでなく、学校の教職員や生徒までもが一緒に楽しみ、さらにはテレビ局、新聞社の取材も受け、香川県内外に本プログラムを広く報せることができました。ホームステイでは、各ホストファミリーが遠い国から家族が帰ってくるかのように準備し、温かくもてなしていただきましたことにより、お別れの際には、涙が止まらない外国青年もいました。このように、本地方プログラムでは、瀬戸内の小さな香川県が日本で一番大きな準備をして、異国の風を待ち望んでいます。この風が、これからもずっと吹き続けることを期待しています。





昨年のリトアニア青年の受入れに続き、今回で2回目のホームステイの受入れとなります。昨年と同様、受入れが済んだ直後は、本当の家族の一員と離れ離れになってしまったようで寂しくなり、心にぽっかりと穴が開いたようでした。しかし、今は刺激的な体験ができた満足感でいっぱいです。

今回受け入れたエストニアの青年は、日本語こそ話せないものの、日本の文化にとっても関心の高い人物でした。安部公房や村上春樹など日本文学の特徴、琳派や浮世絵がゴッホやクリムトなどの西洋絵画に及ぼした影響、陶磁器の「金継ぎ」の技法の魅力など、日本の文化についてとうとうと語る青年に対して、私はあいづちを打つばかり。日本人なのに、日本を語れなかったことが悔やまれます。

ももとは、小学生の息子の刺激になればと始めたホームステイの受入れですが、毎回、家族全員にすて

きな思い出を残してくれる貴重な機会となっています。とりわけ今回は、日本の文化を学び直したいと気付かせてもらえました。とりあえず、手元にある安部公房の「砂の女」を、十数年ぶりに読み直すことから始めてみようと思います。



## エストニア参加青年

私が香川県から持ち帰ったお土産は、亀阜小学校の児童が書いてくれた美しい書道の漢字です。それは輝くという意味を持つ「晴」という漢字です。この字は香川県とその人々に対する私の印象にふさわしいものです。

私たちは10月4日に香川に到着しました。天候に恵まれ、素晴らしい景色を満喫しました。香川で待っていたのは、緑の山々、青い空、海にかかる橋でした。しかし驚きはこれだけではありませんでした。高松市に到着した私たちを迎えてくれたのは、エストニアとヨルダンの国旗を持った地元の方々で贈り物でした。彼らの笑顔に私たちも笑顔で応えました。こうして私たちの友情はスタートしました。

香川県での最初の訪問先は、発電所でした。私たちはそこで活発に交流し、歓迎していただきました。施設見学はよく企画されており、香川と日本の電力の現状について多くの学びを得ました。発電所の屋上から見た光景についても言及せずにはられません。オイル・バンク、ガス・パイプ、発電機など発電所の全貌を見ることができました。海と山々も見えました。このような素晴らしい自然と現代建造物の対比は、日本独特であると思います。

発電所を後にした私たちは、普通寺を訪問しました。ここでも顕著な対比が見られました。発電所の現代的な建造物が、突如として木造の日本家屋に取って代り、タービンの稼働音は鐘の音に取って代わりました。案内役の御親切な僧侶が、日本の仏教の儀式と伝統、普通寺の歴史について話してくださいました。様々な儀式の説明を聞きながら寺を見学し、日本との絆が深まるのを感じました。本堂の地下道を体験したことがとても楽しかったです。暗闇の中、左手の感触だけを頼りに細い道をたどっていると、しばし物質的な世界を離れ、目に見えない形のない深い世界に入り込んでいくように感じました。

香川県でのもう一つの素晴らしい経験は、亀阜小学校訪問でした。全ての国づくりは学校から始まると思います。エストニアではあらゆる場所で教育と学校制度の影響を目にすることもあって、日本の学校現場を見ることにも強い関心がありました。亀阜小学校での経験は非常にユニークで、日本社会のルーツを見ることができました。児童が自らの手で何かも行っていたのには驚きました。給食の準備、備品の移動、教室と廊下の掃除。どの子供も何をどうすべきか心得ていたのです。しかしさらに驚いたのは子供たちの態度で

す。子供たちは、笑ったり、歌ったり、遊んだり、気軽にそれらを行っているように見えました。楽しみながら仕事をするということを日本人から学びたいです。

香川県の最後はホームステイでした。私は短期間でホストファミリーと親密になりました。新しい兄弟と

サッカーをしたり、新しいお父さんから将棋を教えてもらったりしました。神社に連れて行っていただき、浜辺で美しい太陽を見ました。この家族の一員であると感じました。この気持ちを永遠に持ち続けます。エストニアから遠く離れた日本で、いつも笑顔で迎えてくれる家族ができました。

## ヨルダン参加青年

香川県訪問はヨルダン団にとって国際青年育成交流事業全体におけるハイライトでした。傘とキャンディで歓迎していただいたホテル到着時から、帰りの空港出発まで、香川県での滞在は心温まる豊かな経験となりました。

訪問プログラム中、スタッフが私たちのためにハラルフードの特別メニューを準備して下さったことを知り、ヨルダン団一同ありがたく思いました。また、効果的かつタイミングの良い日程でプログラムが組まれていました。

訪問先の発電所にて、私たちは学びの経験をしました。持続可能な資源を活用し、国内の電力を得るための日本の取組に目を向けました。発電所の設備は清潔で、敷地を十分に活用していました。御説明いただいた内容を私たちが全て理解できるよう実行委員の方々に配慮いただき、英語のビデオで発電所の業務の本質

がよく理解できました。

訪問先の善通寺で精神的なすばらしい経験をしましたが、私たちの多くにとって仏教の教義に初めて触れる機会でした。案内役の御説明を聞き、寺の歴史と重要性を理解する下地を得ました。ガイドツアー後の自由時間に、ヨルダン参加青年の多くは寺の周辺の山道を歩き、そこでもインスピレーションを得る経験をしました。歴史と重要性を兼ね備えた善通寺は、香川県の美の象徴でもありました。

香川県プログラムのハイライトはホームステイでした。ヨルダン参加青年は皆、ステイ先の御家庭で温かく、フレンドリーに歓迎していただいたと感じています。ホームステイはメディアやジャーナリズムを通じてでは得られない、人情味あふれる体験となりました。

私たちはこの先も日本への旅を愛情をとともに振り返り、香川のことを懐かしむでしょう。



## 6. 沖縄県

月 日	時 間	活動内容		
9月30日（土）	10:55	羽田空港出発 JAL909便		
	13:30	那覇空港到着		
	14:30	沖縄キリスト教学院大学着		
	15:00～15:30	オリエンテーション、顔合わせ		
	15:30～17:30	コースディスカッション①		
	18:30	ホテル着		
	19:00	夕食		
10月1日（日）	9:00～12:00	3コースに分かれてディスカッション、テーマ別施設見学		
		キャリア形成コース	メディアリテラシーコース	多文化共生コース
		沖縄キリスト教学院大学	沖縄キリスト教学院大学	沖縄市コザ銀天街
	12:00～13:00	昼食		
	13:00～16:00	コースディスカッション②		
	17:00	ホテル着		
	18:00～20:00	歓迎会 *子ども生活福祉部こども福祉統括監挨拶 * チリ代表挨拶 *パフォーマンス		
10月2日（月）	9:30～12:00	沖縄県庁着、各コースディスカッションまとめ、発表		
	12:00～13:00	昼食		
	13:10～13:50	沖縄県庁表敬訪問 *子ども生活福祉部こども福祉統括監挨拶 *ミャンマー団長挨拶 *記念品交換、写真撮影		
	14:45～16:30	首里城視察		
	16:50～19:30	国際通り視察・夕食		
	20:30	ホテル着		
	10月3日（火）	9:30～13:00	沖縄ワールド視察、昼食	
13:30～16:00		平和祈念公園視察		
16:30		那覇エスパーナ着		
18:00～20:00		文化交流会		
21:00		ホテル着		
10月4日（水）	11:50	那覇空港発 JTA004便		



今回、国際青年育成交流事業沖縄地方プログラムの実行委員長を務め、素晴らしい経験をさせていただきました。私は、今年の2月に平成28年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」に参加し様々な学びを得ました。今回は、運営側として事業に携わることで、参加者の立場とは違った視点から事業を考えることができました。短期間での調整ではありましたが、実行委員メンバーの協力の下、各コースとも、コーディネーターや講師とうまく調整することができ、参加青年にとっても充実した内容だったと思います。また、プログラム全体としても「沖縄らしさ」を十分に取り入れられたと思います。

特に、実行委員会では、5日間という短いプログラムの中で、参加青年たちに「何を学び、何を持ち帰ってもらうか」を重点に置きました。事前準備では、何度もミーティングを行い、より良い内容を目指すために実行委員一人一人の役割を明確にして、全体の協力体制で臨みました。この事前準備が、大きな事故やトラブルを防ぎ、無事にプログラムを終えることにつな

がったと思います。今回初めて運営側を経験し、全体をまとめる大変さや、スケジュールの細かい調整、予算内でどう質の良いものにするかなど、私自身とても良い経験をすることができました。

今回の受入れで、チリ、ミャンマーなど普段なかなか交流できない地域の方々と交流できたのは、私も含め沖縄県の参加青年にとっても良い刺激となり、大きな経験となりました。ローカルユースとして参加した沖縄の青年からも、「とても良い刺激を受けた。今後、内閣府事業に参加したい」という声が多数あり、この経験をいかし次につなげてほしいと思います。

運営側として、たくさんの学びや経験をさせてもらい、「また沖縄で受入れをしたい」と思いました。今後また運営側として関われるチャンスがあれば、今回の経験や改善点をいかし、プログラムの質の向上を目指したいと思います。特に、ローカルユースにおいては、早い段階から募集を行い、ディスカッションで必要となる知識や英語力を準備できる機会を作り、ディスカッションの質を高めていけるよう組み立てていきたいです。



今回の2泊3日のディスカッションプログラムに参加して、感じたことが二つあります。

一つ目は、本音で話すことの大切さです。それを感じた瞬間は、ディスカッションをしている時でした。ディスカッションの内容を発表するために、私たちは集まりを持ちましたが、それは思ったより時間のかかるものでした。その理由は、私のグループのメンバーは思ったことがあれば、その場で自分の意見をはっきりと主張していたからです。また、本音で話し合うことで、対立していた意見が、全く別の視点からアイデアが生まれ、その時はワクワクしました。そして、メンバーの社会情勢について本音を交わす機会があり、メディアから得る情報と現場での情報には、ずれがあることが分きました。このことから、私はこれから国際交流をする際には本音で話すことを意識していきたいです。

二つ目は、英語力が足りなく悔しかったことです。ディスカッションには、英語ということもあり、積極

的に参加することができなかつたです。しかし本番の発表では、司会に挑戦しました。それは英語での発表だったので、とても緊張しましたが、今思えば、挑戦してよかったなと強く思います。3か国の青年たちと英語を使って意見をまとめるのは大変な作業でしたが、みんなの顔がキラキラしていて、私もこんなふうに参加したいと強く思いました。もっと英語力があれば、もっと多くのことが吸収できたとし、議論の場でもやりがいがあったと思います。

この経験を糧にして、次はローカルユースとしてではなく、内閣府の事業に挑戦し、まだ会ったことのない国の人たちと本音で話し、自身のネットワークを拡大していきたいです。ネットワークが広がることで、視野が世界に広がり、世界で起きていることに対して、自分のことのように考えるようになると思います。私はそういう人材になることを目指しています。英語力を高め、内閣府の事業に挑戦し、英語でのディスカッションでリベンジしたいです。





## ミャンマー参加青年

青い海と空の美しい島。沖縄は地理的にも、戦略的にも経済的にも日本の要です。本島から遠く離れていることを考えると、この島のインフラはよく整備されています。亜熱帯のこの島は、ミャンマーの気候と似ているため、ミャンマー青年にとって過ごしにくいものではありませんでした。本島から1,500km以上離れたこの島では、住民や生活スタイルの特徴が本島と少し異なります。例えば、仕事を終えたアメリカ軍基地の兵士と地元のスタッフが食事や買い物や娯楽に出かけるため、日常生活が昼間よりむしろ夕方に営まれているように思えました。沖縄の社会は多様性と多文化的な側面が顕著であり、特に西洋文化の影響を色濃く受けていますが、人々は自らの文化と伝統を維持していると思います。例えばシーサーのパフォーマンスは、今も地元住民の独自の文化をあますところなく反映しています。沖縄の人々の最も素晴らしい特徴は、

臆するところなく外国人と交流することです。彼らのコミュニケーションと相互交流のスキルは想像以上に優れていました。首里城では、有史以前より沖縄が栄華を極めていたことがうかがえます。沖縄の南部にある平和祈念公園は、沖縄戦終焉の地とされています。戦時中の写真や遺品、記録映像はこの地の悲劇的な歴史を照らす光のようでした。沖縄の平和と社会の発展のために、涙と血、命が犠牲になった様子をうかがうことができました。美しい景色と豊かな生態系によって、沖縄の経済が観光業で潤っていることが分かりました。アメリカ軍基地も地元住民にキャリアの機会を提供しています。多くの地元のレストランやカフェでゴーヤチャンプルーやトンカツなどの沖縄料理が食べられます。温かいスープに小麦粉から作った麺、豚肉入りの沖縄そばは、ミャンマー青年に人気の料理の一つでした。

## チリ参加青年

私たちは成田から沖縄へ出発しました。沖縄の第一印象は、暑さと照りつける太陽、まばゆいばかりの風景でした。沖縄県のローカルユースは沖縄県の気候と同じく、とても心の温かい人たちでした。滞在中、ローカルユースが私たちに同行し、共感、寛容、友情を示してくれました。

県庁を表敬訪問し、日本での素晴らしい旅について話をさせていただきました。第二次世界大戦中の沖縄の偉大な歴史を学んだことで、私たちは今日の世界に

おける平和と人々の相互協力の重要性について改めて考えました。

また、私たちは即興でギターと沖縄の楽器のコラボバンドを組んで多文化的な環境を作り出し、自文化を沖縄の友人たちと分かち合いました。

ついに沖縄を去る時、私たちは胸がいっぱいになりました。数日間の出会いでしたが、沖縄の友人は私たちの記憶と心に永遠に残るでしょう。





## 7. 奈良県

月 日	時 間	活動内容
10月4日（水）	14:10	関西空港到着 JTA004
	14:30	関西空港出発（バス）
	16:30	奈良県（ホテル着）
	18:00～20:00	オリエンテーション・夕食
	20:10	ホテル着
10月5日（木）	10:00～11:00	奈良県庁表敬訪問 *副知事挨拶 チリ団長挨拶 *写真撮影、記念品交換
	11:10～12:10	昼食
	14:00～16:30	和菓子体験
	16:30～17:30	奈良町周辺散策
	18:00～20:00	夕食
	20:15	ホテル着
10月6日（金）	10:00～12:00	法隆寺拝観
	13:00～15:30	キトラ古墳 入村式 *チリ青年挨拶 見学、古銭作り体験
	18:00～20:00	歓迎会・ホームステイマッチング *くらし創造部部長挨拶 *ミャンマー青年挨拶 *各国パフォーマンス *写真撮影
10月7日（土）		終日ホームステイ
10月8日（日）	12:00	ホームステイ先から近鉄奈良駅に集合
	13:00	近鉄奈良出発
	13:35 / 14:05	京都着/京都発 のぞみ230号
	16:23	東京駅到着 都市センターホテル着

私が内閣府事業に参加したのは3年前の2014年です。国際青年育成交流事業のラオス派遣団員として参加しました。事業から3年が経ち、IYEOでの活動が一通り把握できた頃実行委員長を務める機会を頂きました。プログラムを企画することはもちろん楽しいですが、準備を進める中で今回の実行委員長の難しさを実感しました。それは今まで自身がいわゆる「引っ張るタイプ」のリーダーを避けてきたからです。サブリーダーが得意で、そんな役割ばかりを好んで選んできた私にとって迷いの連続でした。今振り返ると、初めて体験する環境は面白く、多くの発見がありました。

悪戦苦闘しながらも支えて下さった周囲の方のおか

げで無事に終わることができました。文字どおり、参加国を含めたくさんの人の想い・期待・優しさが詰まったプログラムだと思います。自身が参加した際も同様の準備をしてくださった方々がいることを思うと、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

実際のところ、事後活動は仕事や興味のあること・趣味等との両立が難しい時もあります。しかし、関わり続けることで、継続的に気付きや学びを与えてくれるものであると感じました。今後も細く長く続けることを重要視し、自分のペースで事後活動に関わっていきたくと強く感じました。



## ホストファミリー

10月6日（金）から8日（日）まで、ミャンマーの青年を我が家で受け入れました。我が家は、かれこれ10年くらい前から主に東南アジアの青年を受け入れてきました。今回もこのプログラムでのホストファミリー募集を知り、応募することにしました。毎回、海外の青年たちに会えることを楽しみに応募します。（これは応募する直後までです）しかし、受入れの日にちが近づき、3日間をどのように過ごせば奈良を楽しんでくれるのかを考えたり、家の掃除や食材の準備に追われたりするようになると、「ああ、やめておけばよかった」との反省の念に襲われます。今回もそうでした。

何度か「やめておけばよかった」との思いが胸をよぎりました。

受入れの6日ほど前に青年の国や性別が決まり、受入れの日があっという間にきました。今回我が家にホームステイするのは、ミャンマーの女性であることが分かりました。アレルギーの心配等がないとのこととで少し安心しました。また、かつて奈良の短期大学に留学し、最終的には京都の大学を卒業したミャンマー人の女性が当時よく我が家に来ていたことと、私たちが一度だけミャンマーに行ったことがあったのも幸いしました。

受入当日、私は職場を早々に引き揚げ、夫と共に“Welcome Party”会場に急ぎました。パーティーはすでに始まっており、受入側の方々の挨拶が続いていました。会場前方にはミャンマーとチリの青年たちが並んで、通訳を聞いているところでした。この青年たちの中にこれから3日間を共に過ごす人がいるのだなと思うと、なんだか気分も落ち着き、今までの不安や焦りもどこかに吹っ飛んでいました。

さて、今回我が家にホームステイすることになった女性と共に我が家に着きました。お茶を飲みながら、夜が更けるまで様々な話をしました。住んでいる地域、仕事、家族のこと、好きな日本食（苦手な食物）…等。加えて日本式のお風呂の使い方も説明しました。（したつもりでした）その夜更け、お風呂場から夫の声。「風呂の湯がない」やっぱり通じていなかったようです。

二日目、遅めの朝食を済ませ、昨夜決めた東大寺と春日大社に向かいました。鹿を見たいと言っていたので、奈良公園を車で通った時は、“Deer!”と少し興奮気味でした。東大寺の参道では鹿に鹿せんべいをやって歓声を上げている様子から、楽しんでくれていると感じました。ミャンマーは仏教国で彼女も敬虔な仏教徒らしく、大仏の前では靴を脱ぎひざまずいてお祈りをしていました。私もこのプログラムが無事終わるように、彼女が無事国に帰れるようにと、祈りました。

東大寺の一画で「生け花展」が行われており、そちらも見学することにしました。着物にとっても興味があるらしく、浴衣と比べてどうして着物はベーシックな色なのかという質問を受けました。（着物を着る体験をしてもらったらよかったかな）春日大社では、ちょうど七五三が近い土曜日とあって、着物姿の子供に会いました。その姿を見るや「かわいい〜」と日本語で眩くのを聞くと嬉しくなっていました。

社寺仏閣の見学を終えて、夕食の買い出しに行くことになりました。ミャンマーのチキンカレーを作ると言ってくれたので、スパイスやカレーパウダー、野菜を一緒に選びました。帰宅し、手際良くカレーを作ってくれました。いただいてみると思ったほど辛くなく、マイルドでした。ミャンマーでは、チリパウダーを入れて辛味を付けるとのことでした。日本は、カレールーを入れて作るのが定番だと説明しました。ミャンマーに帰ったら日本のカレーをご両親に食べてもらってと、邪道かもしれませんがカレールーをお土産に渡

しました。ミャンマーではカレーもおかずの一つで、日本のご飯にかけることはしないのだそうです。ここでも異文化交流ができました。

この日の夕食のメニューはカレーの他に、揚げ物、野菜の煮物、サラダ、お刺身等にしました。何でもチャレンジしてくれる彼女ですが、ミャンマーでは生魚を食べないから、お刺身だけはだめだと話してくれました。

また、昨夜のお風呂のお湯が全てなくなっていたことは、みんなで大笑いしました。遅くまでお酒を少し飲みながら、様々な話に花が咲きました。

三日目、駅まで送り届けました。写真を撮ったり話をしたりするうちに別れの時間が来てしまいました。短い時間一緒に過ごただけですが、別れとなると寂しさが込み上げてくるものです。「奈良はどうでしたか。楽しめましたか」と聞くと、「とても楽しかった。日本のお父さん、お母さんと別れるのは悲しい。ありがとう」と言ってくれました。「今度はミャンマーで会おうね」と言って涙また涙で別れました。改札口から去っていく青年たちを見送り、無事プログラムを終えられたことの安堵感と、ホストファミリーを引き受けてよかったという気持ちに包まれました。

今回の受入れを通して、私は青年たちの持っている素直な心と若さ、そして彼らの母国に対する愛情に感銘を受けました。私たちも彼らと交流することで、改めて奈良（日本）のすばらしさに気付くことができました。国の事情には様々な違いがありますが、交流を通して理解し合えることはたくさんあります。お互いの違いを認め合い尊重し合うことの大切さを再確認した思いがします。このようなプログラムがあれば私はまた引き受けると思います。反省と充実感と相反する感情に浸りながらも。





## ミャンマー参加青年

沖縄県訪問後、チリ団とミャンマー団は奈良県へと向かいました。到着した途端、沖縄県との空気の違いを感じました。天候は冷涼で、奈良の人々はゆったりとしていました。私たちは皆、ホームステイを楽しみにしていました。

10月4日、訪問初日は空港からホテルに直行し、伝統的な和食のレストランで夕食をいただきました。その後、国際通りを訪れました。翌朝、県庁へ副知事を表敬訪問しましたが、その様子が翌日の地元新聞で紹介されました。鹿が人のそばを歩き回っているのには驚きました。午後は、奈良町の和菓子の老舗で伝統的な和菓子作りに挑戦しました。その後、寺を訪問し、伝統的なレストランで夕食を楽しみました。

10月5日、三日目に興福寺を訪問し、明日香村では古銭作りを体験しました。その後、ホテルに戻り、歓送会でホストファミリーと対面しました。

10月6日、四日目はホストファミリーと過ごしました。大変礼儀正しく、親切で思いやりのある方々でした。私たちは様々な意見、文化、伝統などについて語り合い、奈良の様々な名所に連れて行っていただきました。どのホストファミリーも私たちを家族の一員として迎え入れてくださり、温かい気持ちになりました。10月7日、五日目、半日ホストファミリーと過ごした後、すばらしい新幹線に乗って東京へと戻りました。

総じて、奈良県では沖縄県との気候、文化、伝統の違いを感じました。また、ホームステイでは奈良の人々の生活スタイルを垣間見ることができました。さらに、私たちを単なる客人ではなく家族として迎え入れてくれる新しい友人をたくさん得ることができました。奈良での経験を私たちは一生忘れることはないでしょう。

## チリ参加青年

奈良市では、何百年の歴史を誇る寺院と古くから現存する特別な木造建築物について学びました。奈良公園では大人しくて賢く、美しい鹿に餌をやりました。

奈良県でヨルダン団は地元家庭に温かく迎えていただきました。彼らは遠方から訪れた私たちを自宅に招き、大変親切に受け入れてくださいました。ホスト

ファミリー宅で一泊二日を過ごし、ゆっくりと休養し、興味深い場所に連れて行っていただきました。家族の皆さんと、遠く離れても連絡を取り合おうと約束しました。

歴史と現代が調和する古都、奈良に滞在した後、私たちは新幹線で帰京しました。



国際青年育成交流事業（外国青年招へい）

年度	招へい国	招へい期間	招へい人数（人）		
			団員	団長	合計
平成6年度 1994	アルゼンティン、バングラデシュ、ガーナ、ハンガリー、 ヨルダン、ニカラグア、パキスタン、サウディ・アラビア、 南アフリカ、スペイン、タイ、トンガ、イギリス、タンザニア	27	127	14	141
平成7年度 1995	ブラジル、ブルガリア、チリ、コスタ・リカ、デンマーク、 フランス、イスラエル、ヨルダン、カザフスタン、 ネパール、ニュー・ジーランド、パラグアイ、ペルー、タイ、 アメリカ合衆国、ジンバブエ	25	143	16	159
平成8年度 1996	ブラジル、ドミニカ共和国、エジプト、ドイツ、グアテマラ、 ハンガリー、インド、インドネシア、イスラエル、イタリア、 ヨルダン、カザフスタン、ネパール、南アフリカ、 アメリカ合衆国、ジンバブエ	25	126	16	142
平成9年度 1997	ブラジル、カナダ、チリ、チェッコ、ドミニカ共和国、ドイツ、 フランス、インドネシア、ヨルダン、メキシコ、ネパール、 パラグアイ、チュニジア、ウズベキスタン、ジンバブエ	25	117	15	132
平成10年度 1998	アルゼンティン、ブラジル、デンマーク、ドミニカ共和国、 エジプト、フィンランド、フランス、ドイツ、インドネシア、 ヨルダン、セイシェル、ウズベキスタン、ジンバブエ	25	106	13	119
平成11年度 1999	ブラジル、ブルガリア、チリ、デンマーク、エクアドル、 フィンランド、フランス、ギリシャ、ヨルダン、ロシア、タイ、 トンガ、ジンバブエ	25	104	13	117
平成12年度 2000	オーストリア、ブラジル、デンマーク、エジプト、 フィンランド、フランス、ハンガリー、インド、ヨルダン、 ロシア、タイ、トルコ、ジンバブエ	25	103	13	116
平成13年度 2001	オーストリア、キューバ、ヨルダン、リトアニア、メキシコ、 ミャンマー、ナイジェリア、パキスタン、スロヴァキア、 南アフリカ、スウェーデン、トルコ、ウルグアイ、ジンバブエ	25	105	14	119
平成14年度 2002	オーストリア、キューバ、ヨルダン、メキシコ、モロッコ、 ミャンマー、ルーマニア、スウェーデン、タンザニア、トルコ、 ウルグアイ	24	87	11	98
平成15年度 2003	キューバ、ドミニカ共和国、ヨルダン、リトアニア、モロッコ、 ミャンマー、ルーマニア、セネガル、スウェーデン、トルコ、 ウルグアイ	21	87	11	98
平成16年度 2004	カナダ、チリ、ドミニカ共和国、ハンガリー、ヨルダン、 リトアニア、モンゴル、モロッコ、ミャンマー、ノルウェー、 セネガル	21	85	11	96
平成17年度 2005	カナダ、チリ、ドミニカ共和国、グアテマラ、ハンガリー、 ヨルダン、カザフスタン、ミャンマー、ノルウェー、 セネガル、チュニジア	21	84	11	95
平成18年度 2006	バルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）、ブルガリア、 カンボジア、ドミニカ共和国、ヨルダン、モザンビーク、 ミャンマー、ニュージーランド、チュニジア	21	74	11	85
平成19年度 2007	バルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）、カンボジア、 カナダ、ドミニカ共和国、ヨルダン、マーシャル、モザンビーク、 東ティモール	21	74	10	84
平成20年度 2008	バルト三国（エストニア、ラトビア、リトアニア）、カンボジア、 ドミニカ共和国、ヨルダン、ラオス、マーシャル、モザンビーク、 東ティモール、チュニジア	21	77	11	88
平成21年度 2009	カンボジア、ドミニカ共和国、ラオス、ラトビア	18	42	4	46
平成22年度 2010	カンボジア、ドミニカ共和国、ラオス、リトアニア	18	44	4	48
平成23年度 2011	ドミニカ共和国、エストニア、ヨルダン、ラオス	18	44	4	48
平成24年度 2012	ドミニカ共和国、ヨルダン、ラオス、ラトビア	18	44	4	48
平成25年度 2013	カンボジア、ドミニカ共和国、ヨルダン、ラオス、リトアニア、 ペルー	16	54	6	60
平成26年度 2014	ドミニカ共和国、エストニア、ラオス、ヨルダン、カタール、 タンザニア	16	46	6	52
平成27年度 2015	カンボジア、ドミニカ共和国、エジプト、ラトビア、 モザンビーク、パプアニューギニア	16	49	6	55
平成28年度 2016	ドミニカ共和国、ラオス、リトアニア、オーストリア、 バーレーン、パプアニューギニア	16	43	6	49
平成29年度 2017	ドミニカ共和国、エストニア、ミャンマー、チリ、アイルランド、 ヨルダン	16	43	6	49
計			1,908	236	2,144

**International Youth Development Exchange Program (INDEX) 2017 (Invitation Program)**

**内閣府青年国際交流事業報告書 2017 国際青年育成交流事業（外国青年招へい）**

---

発行	内閣府 〒 100-8914 東京都千代田区永田町 1-6-1 TEL : 03-5253-2111 FAX : 03-3581-1609 URL : <a href="http://www.cao.go.jp/koryu/">http://www.cao.go.jp/koryu/</a>	Published by the Cabinet Office, Government of Japan 1-6-1, Nagata-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 100-8914, Japan TEL: (+81) 3-5253-2111 FAX: (+81) 3-3581-1609 URL: <a href="http://www.cao.go.jp/koryu/">http://www.cao.go.jp/koryu/</a>
編集	一般財団法人青少年国際交流推進センター 〒 103-0013 東京都中央区日本橋人形町 2-35-14 東京海苔会館 6F TEL : 03-3249-0767 FAX : 03-3639-2436 URL : <a href="http://www.centerye.org">http://www.centerye.org</a>	Edited by Center for International Youth Exchange Tokyo Nori bldg. 6F, 2-35-14 Ningyo-cho, Nihombashi, Chuo-ku, Tokyo, 103-0013, Japan TEL: (+81) 3-3249-0767 FAX: (+81) 3-3639-2436 URL: <a href="http://www.centerye.org">http://www.centerye.org</a>
編集協力	日本青年国際交流機構	Cooperation with IYEO (International Youth Exchange Organization of Japan)